

# 日本社会心理学会会報

208号

発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 広報委員会(担当常任理事:三浦麻子)

2015年12月21日

## 日本社会心理学会第56回大会 ご参加ありがとうございました

第56回大会は、晩秋の東京・西荻窪で開催されました。500名超の予約参加に加えて、その半数に達するほどの当日参加をいただくという盛況でした。参加した方々はどなたも、並行プログラムを少なくした研究発表、いずれ劣らぬ魅力のあった3つのイブニングセッションなどを堪能し、充実した2日間を過ごされたことと思います。また、2種類から選べるお弁当、2日目の素敵なランチボックス、休憩スペースに可愛く盛られたみかん、などなど、準備委員会やそれをサポートされた先生方、そして東京女子大学の学生さんたちの細やかなお気遣いが随所にちりばめられた大会でもありました。お世話になりました。ありがとうございました。



### 概要報告

期日:2015年10月31日~11月1日

会場:東京女子大学

準備委員長:工藤恵理子

事務局長:唐澤真弓

1. 参加者数 738名(予約参加508名、当日参加者225、賛助会員5名)
  2. 発表件数 イブニングセッション3件、ワークショップ6件、口頭発表105件、ポスター発表320件
- <発表取消>
- 口頭 15-04 大家慧・竹澤正哲
- ポスター P208-01 諏澤宏恵, P407-01 内海裕里花・内藤哲雄, P426-01 小松さくら・久徳康史・壇平太

### 大会参加記

木村昌紀

東京女子大学にお邪魔するのは、本大会が初めてだった。私は関西の女子大に勤務しており、「西の女子大教員、東の女子大へ行く」という個人的テーマのもとで大会に参加した。賑やかな吉祥寺駅からバスに乗ると、間もなく大学前に到着した。正門を通り抜けると、豊かな緑に囲まれた、落ち着いた雰囲気の校舎が建つ、素敵なキャンパスだった。「うちもいいけど、この大学もいいところやなあ」と感心しつつ、大会初日の爽やかな朝を迎えた。

大会の幕が上がると、刺激的な発表と熱気を帯びた議論が各会場で展開された。本大会も並行セッションが少なく、口頭・ポスター発表の時間帯が区分されていたため、個人発表をたつぷりと堪能することができた。口頭発表では、文化の違いを生み出す一端とされる「関係流動性」の研究が盛んな印象を受けた。私が現在、コミュニケーションの日中間比較をしているせいかもしれない。日中差を生み出すメカニズムに悩む私にとって、耳の痛い(どなたかお知恵を貸してください!)、けれど、興味深い発表ばかりであった。また、「身体化された認知」に関する研究にも刺激を受けた。自らの身体感覚が自覚のないまま認知に影響し、対人行動も変化する現象はコミュニケーション研究にも新たな視点を提供してくれると感じた。ポスター発表では、ご自身でポスター発表するのは10年ぶりというベテランの某先生から今回が社心大会初参加の院生に至るまで、たくさんの発表を聞いて意見交換ができた。



初日のイブニングセッションでは、皆さん同じと思うが、魅力的な企画ばかりでどれに参加するか悩ましかった。現在、勤務校で他分野の先生から「社会心理学だったら調査するでしょ。これも分析できるでしょ。」と、ある大量の自由記述調査のデータを分析する仕事をいただいたこともあり、最終的にテキスト・マイニングのセッションに参加した。初心者の私に大変有難い基本的知識から大規模データの分析方法に至るまで、講師の先生方から解説いただき、非常に勉強になった。「テキスト・マイニングは、知識発見型の分析と思われがちだが、実感では仮説検証型として用いるほうが上手くいく」「一番情報を得られるのは“普通にじっくり読むこと”だが、それが難しい膨大なデータにこそ有効な方法」など、なるほどと思う話をたくさん聞くことができた。



最終日の夕方、某会長が会場内を疾走される姿をお見かけした。座ることが多かったので体を動かしたくなられたのかな?と推論してしまった。少し考えて、学会組織の役割上忙しいのは当然?いや、これは公的な役割ではなく?などといふ妄想に浸ってしまった。

大会最後は、**再現可能性問題に関するワークショップ**に参加した。現行研究手法の構造的問題(問題のある研究実践、出版バイアス、審査基準)と対処策の提案(直接的追試、組織的追試、事前登録制度)、追試の実践などについて登壇者の先生方からお話いただいた。組織的に追試をするなら研究者の関心が多様なだけに対象研究の優先順位をどう決めるか、新たな研究と追試のエネルギー配分をどうするか、などを考えた。文化や時代の影響に関する質疑応答を聞き、再現可能性問題は普遍的な心理メカニズムとは何かを問うことでもありと再認識した。これまで研究計画を立てる際に、「他の誰にもできない研究がしたい」「他の人が取れないデータを取りたい」という理想があった(今でもある)。それが自分の中で理想的な研究だと思ってきたのだが、今回の話を伺って、追試されない研究の科学としての危うさもあらためて感じた。目下葛藤中で、大きな宿題をいただいた気持ちである。

お土産にもらった美味しい珈琲を飲みながら、大会を思い出して参加記を書きました。たくさんの刺激的な研究に触れられて、本当に充実した2日間でした。気持ちよく研究に専念できる、贅沢な時間を提供してくださった、大会委員会やスタッフの皆様の細やかな心尽くしに感謝します。収穫の秋にふさわしい、私にとって実りの多い大会になりました。

(きむら まさのり・神戸女学院大学)

## 名誉会員推戴・川上善郎先生

名誉会員に推薦していただき心から感謝いたします。

日本社会心理学会が誕生したのは1960年10月のことです。社会心理学の可能性に期待し多様な領域の人々によって生み出された学会と聞いておりました。僕が初めて参加したのは1969年ですから、まだまだ創生期の勢いがあったと思います。卒論の関係で東工大に出入りしておりましたが、当時の東工大には宮城音弥、川喜田二郎、永井道雄、穂山貞登先生などがおられ、まさにインターディシプリナリーな環境にありました。穂山先生の研究のお手伝いをしておりましたが、その際に発表したのが日本社会心理学会入会のきっかけでした。それから現在まで45年以上も日本社会心理学会一筋でとおしてまいりました。平凡ですが早いものです。

しかし、残念なことに僕が参加してから20年間くらいは日本社会心理学会の衰退期となってしまいました。今では想像もつかないのですが、会員数が300人-500人程度で、発表数も50件-100件程度という時代が長くつづいたものでした。学会としてのアイデンティティがあいまいになってしまった結果だったと思います。そんな社会心理学会でしたが、いつのころからか、若い方々の献身的な努力によって大きく成長をとげたことは周知のことだと思います。会員数は今では2000名近くにもおよび、まだまだ発展途上にあるようです。喜ばしい限りです。

僕自身はあまり気にしていなかったのですが、学会の会場では、若手の方々の中でスーツ姿がドレスコードになっているという指摘がツイッター上にありました。その中で「自分はコスプレ感覚でスーツにネクタイだから気にならない」というつぶやきもありました。若手にとって学会の場は晴れの舞台ですからスーツ姿は仕方のないという見方もあるでしょう。でも他の人と違うことにこそ価値があると考えるのが研究の世界では大事なのではないのでしょうか。金太郎飴みたいな研究はアリバイ作りのためには楽でいいでしょうが、できるだけ人と違った目立つ研究・ファッションで臨んでほしいものです。そんな学会の方がずっと楽しいとは思いませんか。これからどんなコスプレで参加したらよいか考えているところです。

(かわかみ よしろう)

川上善郎先生は、「うわさ」の社会心理学研究(著書『うわさが走る～情報伝播の社会心理～』(サイエンス社)など)、また、ネット普及初期からオンラインコミュニケーションの研究を手がけてこられました。文教大学、成城大学などで教育・研究活動に従事され、日本社会心理学会では4期8年にわたり理事をお務め下さいました。

## 2015年度日本社会心理学会賞 第17回選考結果のお知らせ

今年も例年にならった方法により論文賞および出版賞の選考が行われました。慎重に審議した結果、下記の各論文と著作が受賞対象として選出されました。

### ○優秀論文賞

大坪庸介(Yohsuke Otsubo)

『仲直りの進化社会心理学: 価値ある関係仮説とコストのかかる謝罪』(第30巻3号 pp. 191-212)

本論文は、社会心理学的視点と進化心理学的視点を統合することにより、ヒトの仲直り過程の理解を目指した論文である。広範なレビューとともに、関係の価値と意図の不確実性が、謝罪の規定因となるとともに、受け手の誠意の知覚や許しに影響を与えることを示す著者自身の実証的研究を軸に、人の仲直り過程を検討した論文である。現代社会におけるクリティカルな問題をあつかい、幅広く行き届いたレビューとともに、優れた論理構成力を持った読み応えのある論文として、さらに、今後の応用/実践的な指摘も有意義な論文として、高く評価された。



## ○奨励論文賞

村本由紀子(Yukiko Muramoto)・遠藤由美(Yumi Endo)

『答志島寝屋慣行の維持と変容: 社会生態学的視点に基づくエスノグラフィー』(第30巻3号, pp. 213-233)

本論文は、特定の社会に生きる人々の文化的慣習や意味体系、そして特定の心理や行動傾向を、当該社会を取り巻く「環境」に対する人々の「適応」という観点から理解しようとする、社会生態学的アプローチを取った論文である。答志島での寝屋慣行を題材に、究極要因としての生態的環境と歴史的経緯、そこから生み出された社会環境の中での実践による維持と再生という多層的な構造を見いだしている。生態環境と社会環境のインタラクティブな関係の中での慣習の維持・再生の過程を見事に描いている点が評価された。生態環境と社会環境の相互作用と、生態環境の特質から自律して維持・再生産される仕組みについて、一般化可能性の高い議論への発展が期待される。

## ○出版賞

栗田季佳(Tokika Kurita)

『見えない偏見の科学: 心に潜む障害者への偏見を可視化する』(京都大学学術出版会)

本書は、障害者やマイノリティへの偏見を主要なテーマとし、我々の心がかもつ偏見を巧みな実験的手法により「見える化」したうえで、それに対する可能な働きかけについて心理学研究の立場から検討し、結論としてインクルージョンの必要性を訴えている。障害者対策としてこれまで取られてきた様々な施策について、学究的に有効・無効な部分を指摘し、現実を踏まえながら社会心理的理論を用いて解決への糸口を提案している点、さらにそれがほかの偏見にも応用可能である点が評価された。研究内容は幅広く、明快な論旨に基づいて構成された好著であり、将来的な研究・実践への期待も含め、出版賞受賞に値する著作として高く評価された。

## ○選考委員会

委員長: 沼崎 誠

委員: (理事) 相川充, 五十嵐祐, 大江朋子, 高比良美詠子, 堀毛一也, 吉澤寛之, (会員) 浅井暢子, 片桐恵子, 福野光輝, 森久美子

(文責: 沼崎誠・編集担当常任理事)

## 受賞者のことば

大坪庸介

この度は2015年度・社会心理学会優秀論文賞を賜り、誠に光栄に存じます。論文を評価していただいた審査委員の先生方には心よりお礼申し上げます。

この論文は、謝罪と赦しに関する自分自身の研究を、すこし大きな文脈の中に位置づけてみたものです。個別の研究では、つついそこで扱っている変数だけに目を向けがちで、視野が狭くなる傾向があります。そこで、一度、少し距離をおいて自分の研究を整理してみたほうがよいだろうと思っていました。授賞式のときにも述べましたが、木下富雄先生から関西社会心理学研究会で話をするように声をかけていただいたことが、今回の論文の構成を考える直接の機会になりました。この場を借りて、改めてお礼を申し上げます。

この論文では、2つの進化心理学のアイデアをひとつにまとめるという試みを行っています。ひとつはコストリー・シグナリング理論といわれるコミュニケーションの進化に関するアイデアです。私がまだ前任校の奈良大学に在籍していたときに、進化ゲーム理論の教科書でこのモデルについて学びました。言葉はチープなので、本当に大事なことは言葉だけでは伝わらないという考え方です。これは謝罪にも当てはまるはずだと思い、最初に簡単なシナリオ実験を実施しました。その結果を [Human Behavior and Evolution Society](#) の大会で発表したところ、[Martin Daly](#) 先生から建設的なコメントをいただき、継続して研究をしようという気持ちを強くしました。

もうひとつのアイデアは、価値ある関係仮説です。簡単にいえば、協力的な関係を一時のいざこざで失うのはもったいながら和解行動が進化したというものです。この考え方をヒトの赦し研究に適用していたのが、マイアミ大学の [Michael McCullough](#) 先生でした。神戸大学に赴任してしばらくして、謝罪だけでは和解の半分だけしか扱えないので、赦しまで手を広げたいと思うようになっていました。そこで、[McCullough](#) 先生に話を聞かせてほしいと思い切ってメールを出したところ、ウェルカムという嬉しいお返事をいただくことができました。すぐにマイアミまで出かけて行き、話をうかがって、赦しを従属変数とした研究を開始しました。また、特大のおまけとして、[McCullough](#) 先生との共同研究も始まりました。

さて、上記の2つの考え方は、よく考えてみるとコインの裏表のような関係にありました。そもそもシグナリング理論とは、シグナルの受け手と送り手の間のコミュニケーションを扱う理論です。謝罪するほうと赦すほうから最初からモデルに含まれていたのです。また、一方がなにかひどいことをした後に、なぜ謝るのかと考えると、その関係を失いたくないから(つまり、その関係は失うには惜しいものだから)という理由がすぐに思い浮かびます。価値のある関係だからこそ、コストのかかるやり方で謝罪をしてでも維持しようとするわけです。このようにして、シグナリング理論と価値ある関係仮説とがつながりました。

このように言ってしまうと、最初から2つの関係に気づいていなかったのがむしろ不思議なくらいです。残念ながらそのような見通しのよさはもっていなかったものの、石の上にも三年をはるかにこえて居座り続けて、やっと今回の受賞につながるアイデアがあたたまったのだと感じています。その意味で、ここでお名前を挙げた先生方以外にも、この研究の継続を後押ししてくださった多くの先生や学生みなさんにお礼を申し上げます。





今回の受賞は、このテーマで研究を続けていくための新しい励みとなりました。研究者としてはまだまだですが、年齢的にはそろそろもらいっぱなしにできない時期にきています。どのようにして成果を社会にフィードバックしていくことができるのか。そのことも考えつつ、研究を進めていきたいと思います。

(おおつぼ ようすけ・神戸大学)

村本由紀子・遠藤由美

この度は、奨励論文賞にご選出いただき、誠にありがとうございました。大変光栄に存じております。研究の遂行や論文執筆をサポートしていただいた多くみなさまに、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

この研究が焦点を当てている答志島の寝屋慣行とは、地域共同体における一種の疑似家族のしくみを意味します。この島の長男たちは中学校を卒業すると数名単位でグループを組んで「寝屋子」となり、原則として26歳になるまでの毎夜、実の両親とは別に定めた「寝屋親」の家を訪れて寝泊まりします。その後も寝屋子と寝屋親、寝屋子同士の間には緊密な相互扶助関係が築かれ、一生涯にわたって続きます。私たちは、この特異な文化的慣習に興味をもち、2009年夏に本格的なインタビューを開始しました。



島に通い始めた当初、私たちは、寝屋親と寝屋子という疑似家族のつながりの探究を通して「家族(の心理的意味)とは何か」という普遍的な問いに迫りたい、と考えていました。これは今も私たちにとって、解き明かすべき大切なテーマのひとつです。しかし、何度か島を訪れ、わずかな時間ながらも島の暮らしに寄り添う経験を重ねることを通じて、当初は考えていなかった新たな問いも、数多く芽生えてきました。この論文で扱うこととなった「文化的慣習とそれを取り巻く多層的な環境との相互関連の過程を探る」という研究テーマも、そのようにして、いわば意図せざるかたちで私たちの前に立ち現れた問いのひとつです。

類似の慣行が日本各地から相次いで姿を消す中、寝屋慣行が今も答志地区においてのみ維持されているのはなぜなのか。私たちは幾度となく、島の人々にこの問いを投げかけました。「寝屋慣行のあり方について話し合いをしていますか?」、「維持していくために何を心がけていますか?」等々。しかし、こうした問いに対する彼らの答えは、種々の集合的努力を重ねているに違いない、という私たちの素朴な推測とは異なっていました。そうした反応への遭遇を繰り返すうちに、「この問いに対する答えは人々の“心の内”にあるというより、むしろ“環境”にあるのではないか」という思いを抱くに至りました。つまり、本論文が依拠する「社会生態学的アプローチ」は、初めから私たちの研究フレームとして存在していたわけではなく、島の人々に教えられた視点にほかなりません。本研究を通じて出会った島の方々、単にインタビューに応じてくださったという意味での研究協力者ではなく、私たちに多くの気づきを与えてくださった、いわば共同研究者であると思っています。

事例研究に向けられる批判の多くは、一事例のみから見出された知見の一般化の難しさに関するものです。しかし、ローカルな現場の事例は必ずしも一般化可能性の低い「例外」ではなく、むしろ、多くの共同体が持ち合わせている特徴を純化したかたちで見せてくれる、理論構築のための源泉であるとも思います。答志の人々の暮らしには、共同体と個人の関係、家族的関係性の心理的意味、文化の生成・維持過程など、社会心理学のさまざまな重要テーマが隠れています。これからは私たちは、事例研究の可能性と限界の両方をしっかり心に留めつつ、この現場に向き合っていきたいと考えています。

(むらもと ゆきこ・東京大学, えんどう ゆみ・関西大学)

栗田季佳

このたびは、荣誉ある賞をいただきありがとうございました。本書が取り上げているのは障害者というマイノリティに対する偏見の問題ですが、このテーマ自体もマイノリティです。そのような本書を評価していただけてとてもありがたく思います。受賞に私の名前しか出ないのは恐縮ですが、編集の方や本書の研究・執筆に関わってくださった方々、選考してくださった審査の先生方、本書を手にとってくださった皆様に感謝申し上げます。



「障害」に関するテーマは、社会問題としての注目や重大さは認知されているものの、しばしば特殊なものと思われることがあります。私はむしろ障害にまつわる問題には人間や社会というものが凝縮されていると思っています。せつかくの機会ですので、本書の出発点である障害者問題を研究する興味深さ、面白さを述べさせていただきます。

たくさん規制が社会で設けられ、若輩者の私でさえ以前と比べるとあらゆる面で息苦しさを感ずるようになりました。研究機関もその例外ではなく、例えば、各学会は倫理規定を設けており、研究者は各研究機関に設けられた審査を通過しなければ研究を行うことができなくなっております。このことは参加者はもちろん研究者の権利を守るためにも重要な規範と手続きですが、その一方で研究者が調査や実験でアプローチできる心理的特性は限られるようになっていくと感ずります。特に、人間の悪性を明らかにするような研究は、制限が強いと思われがちです。スタンフォード実験や服従実験の類の研究は、現在では確実にできません。しかし、これらの研究が明らかにしたことは、悪徳な側面が特定の人間に備わっているのではなく、その素質が人一般に備わっていること、状況や環境によって人間はいつどのようにもなりうることなど、人間性を理解する上で欠くことのできない知見です。

規制が多くなる中で、「どうであるか」よりも「どうあるべきか」に重点が置かれ、人間の本質的な部分が見えにくくなりましたが、抑え込まれた人間の本質は、かえって極端に集中的に現れます。私は、それが所謂「障害者」と呼ばれる人達の周囲に現れやすいと感ずります。物に溢れ、飲食に困らない時代にあっても、ぎりぎりの生活を強いられている人達があります。私たちが当たり前とする生活さえ制限されている人達の特徴には、人間

が何を重視し、何をもちて人と繋がろうとするのか、何を恐れ、嫌悪するのかという基準が現れます。例えば、能力、言語、視線や表情の読み取り、健康であること、安全などが挙げられます。この基準をまたいだ少数派の人達が「障害者」と呼ばれる人達です。

倫理規定の撤廃を推奨しているわけではありませんし、現実には起きている差別を実験で直接的に再現することもできませんが、見えにくくなった人間の心の働きや、社会の矛盾が「障害者」と呼ばれる人達の生活に集まってきます。私たちは自発的にも強制的にも、社会規範に沿うよう自己調整していますが、主張や抵抗を抑えやすい人達への反応には、そういった規制が働きにくく、私たち人間の本質的な姿がそのまま映し出されるのかもしれない。障害者に対する偏見や差別は見えにくくなっただけで、今もすさまじいものがありますが、そこにアプローチをすることは、「障害者のため」を越えて私たちの社会をどう考えるかに繋がると考えています。

障害者を取り巻く問題を「障害者」の問題だけにせず、社会全体の問題として問いかけられるような研究をしたいと考えています。今回の受賞を激励と考え、今後も邁進していきます。このたびは本当にありがとうございました。(くりた ときか・三重大学)

※受賞書籍の書評(執筆著・松田昌史氏(NTTコミュニケーション科学基礎研究所)が『社会心理学研究』第31巻2号に掲載されています。

\*\*\*\*\*

## 廣田君美先生を偲んで

前号でお知らせ申し上げましたとおり、2015年9月7日に名誉会員・元会長の廣田君美先生が逝去されました。廣田先生の社会心理学界への多大なるご貢献に感謝して、愛弟子の一人である浦光博会員より、追悼文を寄せていただきました。

『「うなり3年、かすれ8年』というの、知ってるか』

大学院生になったばかりの頃、先輩にこう聞かれた。何のことかといえば、廣田先生の講義の技術を会得するのに必要な期間のことだった。うなるのは3年も修行すればできるようになる。しかし、かすれは難しい、8年はかかる、ということらしい。

たとえば、先生は講義中に「あー、生きていて良かったあー」というような台詞をおっしゃることがあった。このうち「あー、生きていて」まではうなる。そして「良かった」と続いて、最後の「たあー」では声がわずかにかすれるのである。これが絶妙。聞いている学生にとっては、うなりで緊張が高まる。しかし、高まった緊張が、かすれで一気に緩和される。この緊張と緩和のシーケンスによって学生は一瞬で講義に引き込まれる。

そうなれば、あとは廣田君美オンステージ。もちろん、講義内容のすばらしさは言うまでもない。膨大な知識量に裏打ちされた詳細かつ網羅的な内容でありながら、集中力が途切れることが全くといってよいほどない。こんなに面白い学問があるのか、こんなに人の興味を引きつけてやまない科学があるのか、と90分の講義時間があつという間に過ぎてゆく。

こうして学問の世界に引き込まれてしまった学生は数知れない。私もまたその1人である。大学には入学したものの、たいした目的もなく、パチンコ、麻雀、アルバイトに明け暮れて過ごした2年間。それが、3回生の前期に受けた「グループ・ダイナミクス」の授業で、うなりとかすれにやられてしまった。ちょうど、シャクター(1951)の逸脱者に対するコミュニケーションの集中と拒絶についての講義を聴いていた時である。「自分にはこれしかない」そう思った。以来40年。気がつけば、今でも拒絶や排斥の研究をしている。

廣田先生がわが国の社会心理学研究の発展に残されたご功績についてはあらためて述べるまでもないかもしれない。大著「集団の心理学」(1963年、誠信書房)は刊行後52年を経た今もなお、わが国のグループ・ダイナミクス研究史、社会心理学研究史に燦然と輝き続けている。また、1977年から1982年にかけて刊行された「現代社会心理学の動向」(全8巻)を監修され、社会心理学研究の活性化に大きく寄与された。1978年刊行の講座社会心理学第2巻「集団行動」に寄稿された「集団構造の分化と統合」は、集団のダイナミズムを科学的、学術的にここまで生き生きと描き出せるものかと思わせる内容である。

社会心理学会でのご功績について代表的なものをあげるならば、まず機関誌「社会心理学研究」の編集長のお仕事がある。かつての学会機関誌であった「年報社会心理学」の刊行が終わり、「社会心理学研究」として新たに出発したのが1985年。初代の編集委員長であられた龜山貞登先生から2代目を引き継がれたのが1987年であった。その時、私は編集幹事役を仰せつかった。1993年から1997年までは会長を務められた。当時の事務局幹事は西田公昭、現立正大学教授である。年次大会も1978年の第19回大会と1994年の第35回大会と2度にわたって主催された。

これらのお仕事を近くで拝見する機会を持たれたことは、私にとってこれ以上ない幸運であった。とにかく、後ろ向きになることのない方であった。どんな時でも常に前を向いておられた。そんなお姿を間近で見ていた私にとっては、少々研究がうまくいかなくても、なかなか専任の職が得られなくても、そんなことどうってことないのだ、前を向いて進んでいけばきっと未来が開けていくのだと信じる事ができた。そして、実際そうだった。とは言え、不肖の弟子である私には、未だにうなりもかすれもできてはいないし、あれほどの確で網羅的でありながら、なおかつ躍動感あふれ読み手を魅了して止まない文章も書けはしないのだけれど。

結合的出来事が大好きで、分離的出来事の大嫌いな先生であった。ことあるごとに弟子たちを集め、パーティーを開かれていた。そして、「葬式に出るのは嫌だ」といつもおっしゃっていた。そんな先生の御遺志だったのだろう。2015年9月7日、弟子たちを呼ぶことなく、ご家族のみに見送られて、旅立たれた。ご冥福をお祈りします。

(うら みつひろ・追手門学院大学)



写真提供:(株)応用社会心理学研究所



## 第3回春の方法論セミナー「統計的因果推論への招待」

日時:2016年3月16日(水)12:30開場 13:00~17:30(終了予定)

場所:上智大学四ツ谷キャンパス3号館521教室

企画:日本社会心理学会新規事業委員会

講師:

大塚淳(神戸大学人文学研究科准教授・科学哲学)

林岳彦(国立環境研究所環境リスク研究センター主任研究員・環境リスク学)

星野崇宏(慶応義塾大学経済学部教授・統計学)

清水昌平(大阪大学産業科学研究所准教授・統計学)

司会:竹澤正哲・清水裕士

プログラムアドバイザー:林岳彦

### 因果を特定する

「実験こそ、実証科学の王道だ。調査データなんて、どういじっても因果を特定できない二流のデータだ」—心の底でそんなことを考えている実験至上主義者は意外と多いのではないだろうか？

因果の特定。それは実証研究の最重要目標である。ランダムアサインメントされた実験をおこなえば因果を特定できること、調査データに対しては重回帰分析などを使って交絡要因を統制すること。社会心理学者ならこのくらいは誰もが知っている。だが、そこから先、我々は因果についてどれだけのことを知っているのだろうか。

この図のように、実験社会心理学者は、実験計画法という城壁に囲まれた街の中に住んでいる。だが城壁の外には、疫学や計量経済学など、実験を行うことができないにも関わらず因果を特定しなければならない分野、広大な「交絡の森」が存在している。統計的因果推論とは、実験計画という城壁の外に生きる人々によって生み出された、膨大な交絡要因の中から因果を特定するための一群の分析手法である。

社会心理学では、共分散構造分析(構造方程式)としてその考えの一部が浸透している。

「SEMなら知っている。パスを引くのなら任せてくれ」—そう言うAmos使いが、社会心理学者の中には多くいることだろう。だが無心にたくさんパスさえ引いていけば、それで因果を特定できているような気持ちになってはいないだろうか。

### 統計的因果推論とは

統計的因果推論は、「因果とは何か」に関する洗練された科学哲学的な議論を土台に据え、我々の遥か先を歩んでいる。深く考えず、慣習的に決まった手法を使えば因果を特定できる訳ではない。何を明らかにすれば因果が特定できるのか、因果を明らかにするとはどういうことなのかを緻密に議論する中から、社会心理学ではあまり知られていない様々な手法(例1、例2、例3)が開発されてきた。ビッグデータが利用可能となるに連れて、統計的因果推論に関する関心はますます高まるばかりである。

もし我々が城壁の中に留まり続けるならば統計的因果推論は無用な知識かもしれないが、城壁を出て調査データを扱う他領域の研究者と交流を持つためには、必要不可欠な教養となりつつある。だが統計的因果推論の森は広大だ。星野崇宏、宮川雅己、森田果、岩崎学らによって優れたテキストが執筆されているものの、内容が高度なため、手助けなしで自習するのは非常にハードルが高い。

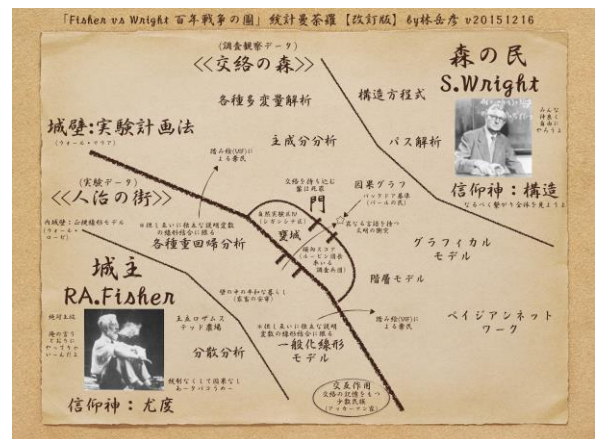
### セミナーの目的

第3回春の方法論セミナー「統計的因果推論への招待」の目的は、この世界へ飛び込むための地図と入り口を提供することにある。まず導入として、因果概念を精密に整理し(大塚)、この分野の見取り図を紹介する(林)。続いて、統計的因果推論において最も洗練された手法である傾向スコア(propensity score)を紹介する(星野)。最後に、「調査データのみから因果の方向(AとBのどちらが原因で結果)を推定することすら可能な場合があるのだ」という驚異的な議論を紹介する(清水)。

本セミナーを通して、統計的因果推論というこの広大な森に踏み込むための第一歩を提供できれば幸いである。

### 講師紹介

大塚淳氏は科学哲学(生物学の哲学)が専門で、因果の科学哲学的な基礎や、ベイジアンネットワークなどに造詣が深い。統計的因果推論は、人工知能の巨人Jude Pearlの生み出したベイジアンネットワーク、そして統計学者Donald Rubinの提唱したルービンの因果モデル(Rubin causal model)を中心として発展してきた。因果概念についての精緻な議論が土台となっており、大塚氏には統計的因果推論を理解するための基礎を紹



介していただく。

林岳彦氏は統計的因果推論と深い関わりを持ち、**ネット上で積極的に発言**するのみならず、「夏の統計的因果推論祭り」、「因果フェス」などのイベントを主催し、この領域の人々をつなぐネットワークとして活躍されている。本セミナーでは、同氏にプログラムアドバイザーとして、企画当初から協力を仰いできた。上の図の作者であることから分かるように、この難解なテーマを軽妙洒脱に描くことで知られている。林氏には統計的因果推論という広大な領域に踏み込むための見取り図を提供していただく。

星野崇宏氏は、統計的因果推論のフィールドを牽引する第一人者であり、同氏が執筆した**調査観察データの統計科学(2009)**は多くの刷を重ねる非常に優れたテキストである。同氏には本セミナーにおけるメイン講師の役を担っていただく。

清水昌平氏は、構造方程式モデリングを用いた因果推定について研究をされているが、調査データから因果の方向性を特定する**LiNGAMモデル**という、非常に野心的な研究で知られる。本セミナーでは「調査データから因果の方向を特定する試み(AとBのどちらが原因で結果か?)という、統計的因果推論における一つの極点について紹介をしていただく。(たけざわ まさのり・北海道大学, しみず ひろし・関西学院大学)

\*\*\*\*\*

## 広報委員責任編集コンテンツ(2)「学術書を書く」

尾崎由佳

**Publish or Perish.**「研究者として生き残るためには、成果を出版するべし。さもなくば消えてしまう」という恐ろしい予言である。この言葉を耳にするたびに、いわれようもない不安と焦燥感を抱く人も、少なくないことと思う。かくいう私も、そのひとりなのだけれど。

そんな私たちに救いの手をさしのべるかのように、**先号の会報(2015年9月号)**では、清水裕士先生および川本大史先生が、「論文を書く」ことをテーマに、そのコツを教えてくれる良書「できる研究者の論文生産術: どうすれば『たくさん』書けるのか」(Paul J. Silvia 著)を紹介してくださった。この特集を読んでさっそく実践に移しました! という声も聞こえてきており、広報委員会としては嬉しいかぎり。

その続編として、今回は「学術書の出版」をテーマとして取り上げたい。紹介するのは、その名も「学術書を書く」(鈴木哲也・高瀬桃子著、2015年9月、京都大学学術出版会)。この本の特徴は、なんといっても“編集者”が書いたという点であろう。「いかにして書くか」よりも、むしろ「いかにして読んでもらうか」にフォーカスし、その根本的な考え方とハウツーを丁寧に教えてくれる。

もちろん、たくさん書くことは大切だ。しかし、読んでもらえなかったら、意味がない。本書では「社会科学の75%の論文は1度も引用され(p.10)ない」という統計データが紹介されており、私は正直、とても悲しい気分になってしまった。せつかく書いたのになあ。

近年、Publish and Perishの気運におされて多量の論文が出版されるようになった反面、その大半は読者の目にふれなくなった。また、電子ファイルがオンライン検索できるようになったことによって、急速に情報アクセシビリティが広がったものの、そこには思わぬ副作用が生じた。特定のキーワードをわざわざ検索しようとする一握りの特殊な(奇特な?)関心をもつ人々だけが互いの論文を細々と読みあうような、スモールワールドが各所にできあがってしまったのである。かつてのように、学術誌の紙面をめくっていったら面白そうな論文タイトルが目にとまるという“偶然の出会い”の場は失われ、スモールワールド間の壁を越境するチャンスは激減した。かくして、あなたの論文は茫洋たるデータベースの海に埋もれ、藻屑と消えてしまう——かもしれない。

著作が読まれていなければ、研究者としての評価にもつながらない。つまり、Publish AND Perish、出版しても消えてしまうことになりかねないのだ。しかし、だからといって私たちは Publish への努力をやめるわけにはいかない。そんなことをしたら・・・恐ろしくて、あまり考えたくない。いつたい、どうしたらいいというのだろう?

それならば、「Publish そのもののあり方を根本から見直して、真に意味のある出版をしようではないか(p.11)」というのが、本書の根幹をなすメッセージである。ただ量産するのではなく、質の良い、読み応えのある作品を作ること。そう、「たくさん書く」ばかりではなく、「たくさん読まれる」ことを目指すことが必要なのだ。

では、なぜ「学術書」なのか? “学術論文”ではダメなのか? メディアの電子化がすすんで紙媒体の出版そのものが危機に瀕している昨今、学術書を出すことに何の意味があるのだろうか? という疑問を抱く方もいることだろう。その疑義に対して、このような時代だからこそ学術書の刊行が大きなメリットをもたらすと本書は主張する。それは、単に業績リストに華をそえるためではない。紙媒体ならではの長所を本書は多角的に論じているが、それらの詳細については第2章をぜひ一読していただきたい。

私自身が本書から読み取った内容から、学術書出版のメリットを端的に表現するとしたら、「幅広い人々を巻き込むことができる」の一言に尽きるのではないと思う。多様な分野にたずさわる研究者がひとつの本を編むことにより、知的交流と研究発展が生まれる。専門的な勉強はしたいけれど学術論文にはちょっと手を出せないと思っている学部生が、図書館で気軽に読みふけることができる。本屋に並ぶ背表紙を眺めて、へえ、こんなことが研究されているのかねと手にとってくれる人もいるだろう。それは隣接領域の研究者かもし



鈴木哲也  
Tetsuya Suzuki  
高瀬桃子  
Momoko Takase

学術書を書く

Rethinking Scholarly Publications

佐藤文隆  
推薦!

学術コミュニケーションの変革期に  
書く意味  
書く技

最前線に携わる大学出版の編集者が  
実践的に解説します。

京都大学学術出版会

れないし、もしかすると会社帰りのサラリーマンかもしれない。本書では「二回り・三回り外の読者」という印象的なフレーズで表現されているが、かならずしもあなたの専門分野に直接関与していない人々が、あなたの本を読むことになる。電子化された学術論文では到底起こりえない現象だ。雑誌論文のインパクトファクターがどうのこうのと言ってみても、それは狭い研究領域内の小競り合いにすぎない。学術書が研究者コミュニティ全体に、いや、社会全体に与える“インパクト”は、そんなものを遙かに上回っているはずだ。

——と熱弁してみたものの、そんなの当たり前だよねとおっしゃる方もおられるだろう。そのとおり。みなさんご存知のことである。多くの研究者が、学術書出版のメリットを重々に理解していることと思う。しかしながら、だからといって皆がみな出版に意欲的というわけではないのは、これいかに？

本を出したほうがいい、出さなきゃいけない、それはわかっているけれど、でもね・・・というのが正直なところではないかと思う。初めての著書出版というのは、どうしても敷居が高い。あまりに未知の世界すぎて、何をどうしたらよいのやら、全く見当もつかない。そこにためらいを感じている研究者が(私も含めて)多数いるのではないかと思う。

そんなあなたに、本書「学術書を書く」をぜひお勧めしたい。だれに、何を伝えるべく、どのように書くかという中心的問題から、章立てやコラム挿入・表紙や本文ページのデザインのしかたといった周辺の(でも大切な)心遣いに至るまで、「読んでもらえる本」を作るためのコツが満載されている。これはまさに、編集者のプロ根性が詰めこまれているといっても過言ではない。本書を読んでいるだけで、いつのまにかイメージが膨らんでくるのが、これ不思議。あたかも自分が初めての著書を出版することになり、編集者に懇切丁寧に手ほどきをしてもらっているような気分になってくる。そして読み終わったころには、これなら出版できるかもしれないぞ？という妙な自信すら湧いてくる。つまり、著書出版のしかたがわからず途方にくれている私たちの背中をドンと押す役割を果たしてくれるのが、本書なのだ。

本来ならばここで、「私が学術書を書いてみました！」と体験記を綴るべきところなのだが・・・まことに申し訳ない。私自身はまだ出版経験が無く、語るべきものを何も持っていない。(よし書くぞ！という気合が入ったことだけはここに宣言しておいて、これから自分を追い込む算段である。)

そこで、ここから語り手をバトンタッチ。最近(2015年9月)初めての著書「**レイシズムを解剖する:在日コリアンへの偏見とインターネット**」(勁草書房)が刊行された高史明さんに、出版までの道のりについてインタビューをした模様を以下に報告する。 (おざき ゆか・東洋大学)

## ■「単著が出るまで」インタビュー

高史明



——単著出版おめでとうございます。どのような本か、ご自身で語っていただけますか？

高「在日コリアンへの偏見をあつかっていますが、『解剖する』というタイトルのとおり、現在起きていることを客観的に明らかにしたいというスタンスから書きました。テーマ的に生臭い問題なので、イデオロギー間の争いにならないように、できるかぎり客観的になるよう心がけました。心理学者には敬遠されがちな問題かもしれませんが、敢えてこのようなテーマを扱ってみたいという意欲的な人たちのために、参考になったらと思います。」

——この本を出版することになったきっかけは？

高「出版社の方が、ツイッターで以前からフォローしてくれていました。その後、ある研究会での発表を聴きに来てくださり、『博論を出したら出版しましょう！』と言ってきて。結局、そのあと3年かかってしまったのですが、ずっと待っていてくれました。こういうパターンはめずらしいと思うので、あまり参考にならないかもしれませんが・・・」

——どのような人たちに読んでほしいと思いますか？

高「まずは社会心理学者に読んでほしいです。あまり人がやりたがらないテーマなのだけれど、これを読んで関心をもって、どんどん研究を進めてくれる人が出てくるといいな。あとは学生ですね。学術書はけっこう値段が高いものですが、この本はできるかぎり印税分を低くして、学生さんにも手がとどくお手頃な値段設定にしました。だから僕は儲かっていません(笑)」

——出版後、どのような反響がありましたか？

高「心理学関係者から、かなりよい評価をもらっています。難しいテーマにもかかわらず科学的に取り組んだ姿勢を評価してくれたみたいです。それに、メディアや出版社からのアクセスが多くなりました。メディアの反応は、真面目なものが多いですね。偏見問題を煽るものにしたくないという姿勢を尊重してくれたと思います。在日コリアンの方々の中には不快感を感じる人がいるかもしれないと心配していたのですが、予想に反して、好意的に受け止めてもらっています。自分たちをとりまく得体のしれない状況が少しわかってくると、不安がおさまるといいます。そういう点で評価してもらったことも嬉しいです。」

——出版にあたって、工夫された点は？

高「博士論文を本にしたのですが、論文の内容だけだと一般の人にはとつきにくいので、導入部分をつけくわえました。興味を持ってもらえるように、わかりやすく、でも学術的な格調を保ちつつというのが難しかった。今回、一番難しかったところかもしれません。あとは、外国人名をカタカナ表記にするのが大変でした。発音のしかたをひとつひとつ調べてくれた友人がいて、とても助かりました。本の表紙も友人たちにつくってもらいました。タイトルを『解剖』としていますし、メスとかをあしらってクールな感じにしたいなと思ったら、友人のひとりがイメージ画像を作成してくれて、もうひとりが装丁をしあげてくれました。仕上がりは、自分が漠然とイメージしていたものがそのまま形になったようで、ものすごく気に入っています。自分の部屋に飾っているくらい(笑)」

——質問の角度を少し変えますが、本書のテーマとなった研究をはじめたきっかけは？





高「子どものころにさかのぼりますが、引越しが多くて、転校先でいろいろ攻撃されて。自分の名前から在日(コリアン)と間違えられることがあって、そういう問題があるんだなということ、子どものころから身に染みてわかっていました。でも、そのころはそれを研究しようとは考えていませんでした。大学で心理学の道に進んで、地下の暗い研究室に籠っていたころに、外の世界を感じようとおもってインターネットにアクセスすることが多かったのです。すると、在日に対する反感が過熱してきているなど感じて。まわりにもネット上の言説に影響される人々がでてきたこともあり、これは良くないことが起こりつつあるなという印象を受けました。少しずつ文献を調べていったりすると、日本ではほとんど研究されていないことがわかりました。最初は潜在的偏見に興味をもっていましたが、それ以前に、顕在的偏見の国内データがぜんぜん足りてないなど。日本の話をしたい、それならまず顕在的偏見をきちんと調べないといけないと思って、質問紙調査からスタートしました。それが2008年ごろです。」

——研究遂行にあたって、工夫された点や、苦労された点は？

高「苦労というか、いろんな面で未熟さがあつたなと思います。あらかじめビジョンがあれば、計画的にデータをとれたのですが、あっちいったりこっちいったりと迷いがあって、使えないデータをとってしまったり・・・でも最終的には、筋の通ったものにまとまったと思っています。時間をかけただけのことはあつたと思う。そのあいだ支え続けてくれた妻(雨宮有里)への感謝の気持ちでいっぱいです。そして友人や先輩たちにも随分助けられました。ツイッターを通じて知り合い、支えてくれる人もたくさんいました。でも、いろいろ批判も受けました。テーマ自体が政治的に偏向していると見られたり、科学者としての立場を損なっているとされたりして。このテーマは自分には重すぎるように感じて、けっこう後悔することもありました。もっと初めから信念をもってガシガシやっていたら、もっと早く仕上がったのかもしれない。ただ、2013年(「在日特権を許さない市民の会」の活動が盛んにニュース報道に取り上げられた)あたりから社会的関心が高まってきて、こういう研究の必要性が認識されるようになり、少しやりやすくなった感があります。でも、それは社会情勢が悪化しているということなので、いいことではありません。だから、自分の研究が必要とされているということ、喜んではいません。でも、誇りは持っています。」

——これからの研究や執筆活動の展望は？

高「いま、新書執筆の依頼がきています。本屋でこの本を見つけた出版社の人が、声をかけてくれました。新書ですから、さらに一般向けになりますが、筆致はこのまま、客観的でクールな感じでいきたいと思っています。自分自身の研究だけではなく、最小集団パラダイムとか、広い研究文脈から偏見にかんする知見を紹介したいです。今後の研究活動では、この本では明らかにできなかったことがまだあるので、それを追っていきます。また、これまでの研究から、デマとか流言の重要性に気付かされたので、それに関する計画も立てています。」

——最後に、これから学術書出版を考えている方々への応援メッセージをお願いします。

高「研究者としての評価は査読論文でなされるべきだと思うけれども、学術書ならではの良さも沢山あると思います。たくさん研究をもちこんで、ひとつのストーリーを描き出すというのは、文字数の制限の緩い本だからこそ出来ること。あとは、学者だけではなくて一般の人にも、研究を知ってもらうことができます。本屋に並んだり、Amazonに表示されたりして、たくさん人の目にふれます。研究を社会に還元するために、本というのは良いツールだと思います。」

(たか ふみあき・神奈川大学)

——大変貴重なお話を伺うことができました。高さん、ありがとうございました！

\*\*\*\*\*

## お知らせ

2015年11月7日に、名誉会員の星野命先生(国際基督教大学名誉教授)が逝去されました。享年88歳。星野先生は、特に文化とパーソナリティの研究の第一人者で、日本社会心理学会では第9～10、13～15期に常任理事を務められるなど、日本の社会心理学界に多大な業績を遺されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

機関誌「社会心理学研究」第31巻2号が刊行されました。冊子と共に [J-StageのPDF/HTMLによるオンライン公開版](#)もご活用下さい。また、掲載論文をダイジェストした「論文ニュース」では、5本の論文をご紹介します。

\*\*\*\*\*

## 会員異動(2015年9月17日～12月14日)

### 入会

#### 《正会員》

#### ・大学院生

加藤はるみ(早稲田大学大学院人間科学研究科)、澤口右京(目白大学大学院心理学研究科心理学専攻)、張 騰飛(早稲田大学大学院アジア太平洋研究科)

《準会員》

森田秀和(HM コンサルティング代表取締役)

退会

星野命(物故)、山西悠平

(以下自然退会)池谷光司、石崎香菜子、上田光世、大塚巧也、岡山慶子、折橋徹彦、角 潤、片山美恵子、加藤隆弘、川村幸弘、工藤陽美、倉元俊輝、黒阪健吾、胡 一逾、小池芙美代、幸田紗弥華、小谷侑輝、後藤沙奈、齊川富夫、齋藤高史、坂口菊恵、阪本由美子、佐藤正子、篠原 優、柴田健史、柴山真貴子、島田 歌、島本健太郎、星地優花、徐 侑里、高岡しの、高山美穂、立石理恵、田中祐次、田部井明美、鶴羽貴子、土居知道、土門 弘、長井るな、長坂邦仁、中妻拓也、中村雅彦、布井雅人、野本可奈、平野美沙、本多悠葵、前 奈緒子、松原健太、柳田尚也、山田尚樹、劉 兵、渡辺由希、金 恩京、邢 蓮姫

所属変更

中島純一(公益財団法人流通経済研究所研究顧問)、小林哲郎(Department of Media and Communication, City University of Hong Kong)、谷忠邦(江崎グロコ株式会社マーケティング本部 CR 部)、長内優樹(合同会社セカンダリー心理学リサーチセンター)、兪 善英(韓国教育開発院)、中妻拓也(立命館大学衣笠総合研究機構人間科学研究所客員協力研究員)、井上和哉(国立研究開発法人産業技術総合研究所特別研究員)

\*\*\*\*\*

## 『社会心理学研究』掲載予定論文

### 第 31 巻第 3 号(2016 年 3 月刊行予定)

《原著》

森 康浩・小林 翼・安保芳久・大沼 進「家庭での省エネルギー行動に対する内発的動機付けの長期的な効果:実際のエネルギー使用量と自己申告による省エネ行動を用いた検討」

《資料》

中西大輔・横田晋大「集団間葛藤時における内集団協力と頻度依存傾向:少数派同調を導入した進化シミュレーションによる思考実験」  
豊沢純子・竹橋洋毅「110番通報の正確性および迅速性と関係する要因:模擬場面を対象とした実験研究」

\*\*\*\*\*

### 編集後記

第 56 回大会で初めて東京女子大学を訪問。森閑のキャンパスは勤務先と同じミッションスクールながらまた異なる良質な雰囲気、感銘を受けました。ところで西荻窪周辺は東京のどういう地域と形容すべきかとツイッターでふと聞いてみたら、武蔵野だ、いや新宿まで 10 分なのに、しかし山の手はあるまい、と諸説紛々侃々諤々。研究者にこの手の定義問題を振るんじゃなかったと反省しきりです。某サイトによれば京都で言うと一乗寺界限だとも。そのほど近く(北白川)で生を受けた私は、勝手に親しみを増しました。異論は認める。では皆様、どうかよい年末年始を。(asarin)